

# ケヴィン＝リンチの都市論

岡 本 耕 平

## 1. はじめに

本稿は、先頃没したアメリカ合衆国の都市計画家 Kevin Lynch の都市論を紹介するとともに、都市地理学の立場からそれを検討することを目的としている。

1960年代の計量革命以降、都市地理学には、人間生態学、新都市経済学、行動論、新マルクス主義、新ヴェーバー主義、人文主義など多様なアプローチが林立してきた<sup>(1)</sup>。このうち行動論的アプローチは、次のような問題点を抱えている。それは第1に、わが国の「人文地理」誌の年間展望においてもしばしば指摘されているように、認知研究と行動研究が乖離してきたこと、第2に、意志決定理論の現実性への疑問、第3に、個人の選好を過大視するあまり、社会的枠組みが欠如してしまっていること、である。そのため近年では、制約の概念や時間的視点を導入することによって社会的枠組みを確保する試みがなされ、時間地理学 (Time Geography) の展開へとつながっている。

こうした状況において Lynch の都市論を論ずるのは、彼の *The Image of the City* が行動論的アプローチのルーツの1つであり<sup>(2)</sup>、しかも彼がその後の著作で時間の側面を重視している、という点にもあるが、より大きな理由は、Lynchが扱っているのが、そもそも地理学の土俵である都市の物的環境であり<sup>(3)</sup>、しかも彼が都市計画家として常に現実と対峙してきた、という点にある。すなわち、都市の物的環境とそこに暮らす人間の関わりについて、さまざまな研究アプローチ間のアカデミックな方法論上の論争を越えた、現実に根ざした視点を、彼の都市論から得ることができるのではないかと期待するからである。

## 2. ケヴィン＝リンチの略歴と主な著作

Kevin Lynch は、1918年シカゴで生まれた。エール大学在学中 (1935-1937年) に建築学を学ぶが物足らず、当時ウィスコンシン州にあったタリアセンと呼ばれる Frank Lloyd Wright 主催の建築学校に1年半在籍した。軍務についた後、1947年マサチューセッツ工科大学 (MIT) で都市計画の学士号を得たが、卒業の1年後に、彼自身も驚いたことに上級の学位がないにもかかわらず、MITのティーチング・スタッフとして招かれた。MITでは、敷地計画及び都市計画を担当し、実践を重んじた教育をおこなった。1978年にMITを退官した後は、Carr, Lynch Associates を主催して環境デザインのコンサルタントに従事し、1984年66歳で亡くなった。Lynch は、大学在職中から各地の都市計画の実務・調査に携わっており、生涯を通

第1表. 都市地理学のアプローチ

理論のルーツ	さまざまな理論的アプローチ		
	1965	1975	1985
シカゴ学派 社会地区分析 人間生態学	生態学的研究	生態学的研究	生態学的研究
新古典派経済学 土地利用経済学	都市経済学	新都市経済学	新都市経済学
環境心理学 組織論 行動主義心理学	行動論	行動論	行動論
マルクス主義		新マルクス主義	新マルクス主義
ヴェーバー流社会学 地域権力研究		新ヴェーバー主義	新ヴェーバー主義
現象学 実存主義 観念論		人文主義	人文主義

出典：Bassett, K. and Short, J. (1989)：注(1)

太字は、そのアプローチがその時期卓越していることを示す。

じて、理論家・教育者であるとともに、都市計画の実践者でもあった。<sup>(4)</sup>

Lynchの都市論は、こうした経歴のなかで生まれたものであり、常に都市計画の教育と実践から得た感覚を背景にしたものであった。彼の都市論の検討を行う前提として、主な著作の概要を、出版された年代順に見ておくことにする(著書・論文の一覧はAPPENDIX参照)。

最初の著書は*The Image of the City* (1960年)である。ここでは彼は、都市環境のわかりやすさ(legibility)に価値を置いた。環境のイメージを3つの成分(identity, structure, meaning)に分け、それらのうちmeaningを捨象して、アメリカの3都市の都心地区で住民のpublic imageを調査し、イメージの5つのエレメント(path, node, district, edge, landmark)を抽出した。そして、個々のエレメント及びエレメント間の構造のimageabilityが高い都市ほどわかりやすいとした。

*Site Planning* (1962年, 第1版)は敷地計画の教科書である。計画技術の推移にともない、その後約10年おきごとにページ数を増加して第2版・第3版を出版した。「何らかの設計原理に固執することなく設計者の自主的な思考と行為を奨励するLynchの教授スタイルの要約」

という Appleyard の<sup>(5)</sup>評からもわかるように、テクニックの列挙ではなく、考え方を重視した。「敷地計画は、要するに、空間と時間における3種の位置パターンを扱うのである。アクティビティのパターン、動線のパターン、物的形式がそれである (Lynch, 1971: 邦訳 p. 307)」として、場所と行為の関係づけ、動線システム、空間の形態と感覚を重視している。

*The View from the Road* (1964年) は、動いている観察者にとっての連続する視覚環境の分析であり、高速道路の設計に応用された。

*What Time Is This Place?* (1972年) は、時間の広範なイメージについて述べたエッセイである。過去から未来にわたる景観保存に関する議論に始まり、時間はどのように私たちの心の中に組み立てられていくのか、どのようにすれば環境の中に過去・現在・未来を表現することができるのかを論じた。そして、こうした内部の時間と外部の時間との調和が重要であるとした。

*Managing the Sence of a Region* (1976年) では、環境の知覚的な質とは何か、現実にそれが社会的な重要性をもっているのか、それを実際に地域のレベルで運営できるのか、を論じた。この著作は、具体的な事例・技法集が巻の半ばを占めている。

*Growing up in Cities* (1977年) は、ユネスコの後援で行われたアルゼンチン・オーストラリア・メキシコ・ポーランドでの子供の空間利用と空間に対する評価に関する実態調査の報告書をまとめたものである。

晩年の *A Theory of Good City Form* (1981年) は、Lynchの都市論の集大成である。都市の普遍的規範理論の構築を試み、都市の性能 (performance) の指標として、活力 (人間の生物学的基盤の維持)、感覚 (物的環境と知覚・認知との関係)、適合 (物的環境と行動・機能との関係)、アクセス (人・活動・物・場所・情報への到達)、管理 (所有者・利用者・管理者の関係)、そして効率と公正を挙げた。

以上の著作には、Lynchの首尾一貫とした信念と姿勢を見取ることができる。それは、①物的環境が人の心理的・社会的・生理的側面など広い側面に影響を与えるという確信、②そこに住み活動する住民が、環境をいかに感じ考えるかの重視、③一般の人々自身が環境デザインに関わることの重視、である。そして、こうした姿勢のもとで Lynch は物的環境と人間に関するさまざまなテーマを論じたが、それらは、「都市の空間的イメージ」「都市の中の時間と活動」「子供の成長と環境」「優れた都市」の4つのテーマにまとめることができるであろう。次章以下では、これら4つのテーマそれぞれについて、Lynchの都市論とその展開を検討することにする。

### 3. 都市の空間的イメージ

Lynchの業績のうち、その後に与えた影響が最も大きかったのは、最初の著書 *The Image of the City* である。この研究が画期的であった最大の理由は、環境の質をめぐる議論がとかく抽

象的になりがちなものに対して、都市内に存在する具体的な物的要素に立ち返って論じたことにある。一方、これまで次のような問題点が指摘されてきた。第1に、都市を視覚的な面からのみ捉えたため、イメージや認知を視覚と同一視するという混乱を招いた。<sup>(6)</sup>第2に、イメージのエレメントを imageability の強弱によって地図化したため、イメージが極めて地図的なものであるとの固定観念を助長した。第3に、public image に注目して個人や社会集団にとっての meaning を捨象したため、また、調査対象を都心地区に限ったため、都市の社会的・機能的側面が欠如した。

これらのうち第1と第2の点は、問題点と見なし得る反面、観点や表現方法の単純化が研究内容を明確化したと評価することもできるであろう。しかし、第3の点は、そもそも都市の public image が本当に存在するのかという根本的な問題である。Lynch は、public image があるからこそ、各個人は環境の中で首尾よく行動し、仲間との協力をすすめていくことができるのだとして、ある都市の住民の大多数が共通に抱いているイメージ、すなわち public image が存在すると考えた。そのため必然的に、都市空間の中で住民の大多数にとって比較的馴染みが深く public image の存在が仮定できる場所である都心地区を対象にして研究を行った。だから、「都市のイメージ」は正確に言えば「都心地区のイメージ」である。しかも、都心を都市内の一つの単体と捉えてそのイメージを語るのではなく、都心を面的に広がりを持つ空間として捉え、その内部の要素について検討した。したがって、その空間はいわば建築空間であり、郊外との関連も意識した、地理学における都市空間とは異なっている。また、調査対象者も少人数で、都心地区で働く管理職者などのホワイトカラーが主であった。しかし、都市空間を、もっと広範で多様な地域からなり、また、そこに住む人々も、もっと多様な社会階層・社会集団に属するものと捉えた場合、都市のイメージも多様なものとなるであろう。

このことを意識して行われたのが、Lynch を顧問とするロサンゼルス都市計画委員会が1971年に行った調査である。<sup>(7)</sup>これは *The Image of the City* と同様の方法を用いた調査であるが、対象地域は50~70km四方におよぶロサンゼルス都市圏であり、対象者も都市圏の異なる地区に居住する、異なる社会経済的階層に属する住民であった。調査の結果、住民の社会経済的地位の違い、あるいは人種的な違いによって、都市圏内でイメージされている範囲が大きく異なっていたのに対し、高級住宅街に住む白人の認知範囲は都市圏全域におよんでいた。これは、社会集団・人種集団によって経済力・指向・疎外といったものが原因となり、空間を克服する能動的な態度とそれへの制約が異なって現れ、結局、都市のイメージの違いとなるためである。この調査で主として検討されたのは、もはや path や edge などイメージの個々のエレメントではなく、認知範囲の広さであった。

この調査では全く触れられていないが、都市における社会集団について考える場合忘れてならないのは、社会地域構造のイメージへの影響である。つまり、社会階層による居住位置の違

い(例えば都心との位置関係)も認知範囲に影響を与えている可能性がある。どの地区の住民も、都心地区には比較的に頻繁に出かけるがため、自分の居住地区と都心とを結ぶ範囲を比較的よく認知していると仮定すると、郊外に住む白人の認知範囲が広いのは、そこが都心から比較的遠く、都心との間に介在する広い地域が認知範囲に含まれるからであり、それに対し、少数民族の居住地区は都心近くに位置するため、住民の認知範囲が狭いのだとも考えられる。

このように、都市空間のイメージを、都市住民の居住地・就業地の位置関係や日常的な活動といった生活空間から捉えたとき、現代の先進国、特にわが国の大都市地域に生活する住民の生活空間の変容は、都市空間のイメージにどのように影響するであろうか。今日の大都市地域では、地域的な機能分化と郊外化が極めて進み、それにもなって交通機関も発達してきた。そのため、日常的な移動距離は増大し、生活空間の中で都市の境界はあいまい化している。また、夜の生活空間と昼の生活空間は大きく分離し、生活空間は連続的なものから位相的なものへと変化した。<sup>(18)</sup>こうした状況では、もはや都市空間を面的にイメージすることは困難であり、人々は、移動する線と滞留する点からなる都市のイメージを持つようになったのではないか。新たな観点からの「都市のイメージ」の分析が必要であろう。

#### 4. 都市の中の時間と活動

上で述べたように、現代の都市環境と人間との関係を考えるためには、時空間に展開する人々の日常的な活動に注目する必要がある。都市の時空間と活動に関する研究は、従来2つのグループでなされてきた。ひとつは、Chapinを中心とするノースカロライナ・グループであり、今一つは、Hägerstrandを中心とする Lund 学派である。前者が、帰納的アプローチをとり、選択(choice)を重視し、いわば人間を active な存在と見なすのに対し、後者は、演繹的アプローチで、制約(constraints)を重視し、人間を reactive な存在とみなす。<sup>(19)</sup>

Lynch は、*What Time Is This Place?* を中心に彼の時間論を展開するが、ノースカロライナ・グループ、Lund 学派のどちらとも直接の関係は認められない。それは、この著作が1972年という比較的早い時期に書かれたということもあるが、Lynch は、制約・選択といった操作的概念によって何らかのモデルを提出することを意図したのではなく、「空間と時間のイメージ」に関するさまざまな議論を通じて、環境における時間の重要性を説くことを主眼としたためであろう。例えば、空間に領分(territory)があるように時間にも領分があり、「景観が満足すべきものであるためには、ある種の領分が必要不可欠である(Lynch, 1976a, 邦訳 p. 41)」あるいは「人々がそれぞれの生活空間と生活時間に対して抱いている心的イメージを分析することによって、場所の感覚を理解する鍵を見つけることができる(同上)」といった言質にそれが表れている。結局、Lynch の時間論の底を流れる主題は、人が生活時空間の中でいかに都市とかかわるか、すなわち、日常の中で、いつ、都市のどの部分にコミットするかが重要であり、このコミットの歴史の集大成が現在の都市である、という認識であった。

ところで、人々が都市環境の中で最も強い関心を抱く対象は、物的なものの自体よりも、そこで活動する他の人間である。つまり、人間の活動も知覚の対象となり、環境の質を形成する (Lynch, 1971, 邦訳 pp. 225-254 : Lynch, 1976a, 邦訳 pp. 127-128)。したがって、Lynch は、環境を設計する際、耐久性をもつ物理的な人工物だけでなく、人工物間で繰り広げられる人間の活動にも関心を払わなければならない (Lynch, 1972a, 邦訳 p. 102) として、*What Time Is This place?* の最後を、人々の実際の時空間活動データを得ることの必要性を唱えて結んでいる (Lynch, 1972a, 邦訳 p. 355)。

これは、認知の主体である人間の時空間だけでなく、客体となる人間の時空間についての考察も必要であることを示している。Lynch の時間論は、先に述べた2つのグループと直接の関係は認められないが、主体の時空間と客体の時空間を合わせて考察しようとする視野は、active なアプローチと reactive なアプローチの統合の可能性を感じさせる。<sup>(10)</sup>

## 5. 子供の成長と環境

Lynch の研究全体の基調は、物的環境が人の心に大きな影響をもたらすとの確信であった。その影響は、人の一生のうちで成長期にあたる子供時代に特に強く作用する。「空間と時間の概念は、ともに子供時代に芽ばえ、発達していく (Lynch, 1972a, 邦訳 p. 345)」。この考えは、都市環境のわかりやすさに価値をおいた *The Image of the City* においても、研究の主要なモチーフであった。わかりやすい環境は、ある秩序をもった環境である。秩序ある環境は、単に道に迷うことを防ぐだけでなく、各個人の成長にとって有益な基礎となる。「それは大きな座標系として、あるいは、行動、信念、知識などを組織するものとして役立つであろう (Lynch, 1960, 邦訳 p. 5)」。そして、すぐれた環境イメージは、集団のコミュニケーションのシンボルとなり、あるいは共通の思い出を形成するという社会的役割をもつ。

こうした信念に基づき、*Growing up in Cities* では、実際子供たちが自分たちの周囲の環境をどのように感じているかが調査された。調査では、世界各地に住む子供たちによって描かれた生活空間の手書き地図が収集されたが、描写された内容は、子供たちが生活している環境によってかなり異なっている。例えば、アルゼンチン北部の地方都市郊外やポーランド南部の農村に住む子供たちの手書き地図が、丘や森や友達の家などたくさんの要素からなる生き生きとしたものであったのに対して、ワルシャワとクラクフの周辺住宅団地に住む子供たちのそれは、ごたごたとしたアパートの住棟が並ぶだけの貧しいものであった。

この調査では、手書き地図のほかに、子供の行動観察、生活時間配分 (time budgets) の調査、子供・親・公職者への個別面接調査などが行われたが、そうした中で明らかとなったのは、プログラム化されていない空間と時間が子供にとって価値があるということである。それは、荒れ地や街路といった空間や、学校・塾・テレビの合間のちょっとした時間である。子供たちは、こうした「無用の」空間や時間での活動に喜びを感じているが、残念なことに、彼らの時空間

のほとんどは予定 (program) に縛られてしまっている。

また、Lynch は初期の研究で、子供時代の環境の要素について調査している (Lukashok and Lynch, 1956)。40人の大人に子供時代の屋外の物的環境についての記憶を尋ねたところ、彼らは子供時代、地面を強く意識しており、芝生が好きでアスファルトが嫌いであった。また、木立ちは、単に建物や沿道を飾る景観ではなく、木陰・木登り・落書き・隠れんぼ・ファンタジーの場所であった。地形の思い出も語られ、丘と水辺が喜びの場所であった。また、交通機関には、嫌悪と好奇心というアンビバレントな感覚を抱いていた。このように、子供時代の環境への視野と価値は、大人のそれとはずいぶん異なっている<sup>(11)</sup>。

都市化の進展につれて、都市住民の生活空間が、面的な連続空間から非連続の位相空間に変化したことは前に述べた。この変化は、子供から大人に成長するにつれての生活空間の変化と一致する。すなわち、子供時代の生活空間は、家を中心とする比較的まとまりのある密度の濃い空間である。この空間は、徒歩空間であり遊び空間でもあるため、連続した面的なものとして意識されやすい。しかし成長するにしたがって、生活の時間と空間が機能分化していき、鉄道や車の利用ともあいまって、空間を連続的に把握することが困難になる。物的環境が人の心に大きな影響をもたらすのだとすれば、重要なのは、子供時代を過ごし、その後の原風景となる空間である。しかし、この空間も、現代においては大きく変質しつつある。その原因の第1は、機能的な人工物による空間の充填である。ポーランドで調査されたように、郊外地域の画一的なアパート群は子供に貧しいイメージしか与えない。また、完璧に舗装された現代都市では、子供の遊び場は、遊び場としてプログラム化された公園・遊園地に限定され、子供にとって価値のあるプログラム化されていない空間は、ほとんど見あたらない。第2に、生活時間の規律化、同時化 (synclonization) が、子供の世界にも深く浸透し、子供たちが環境を自ら探索して発見する、いわば余分の時間を持つことが難しくなったことにある。

Lynchは、子供時代に限らず、個人の生涯の成長 (development) に寄与する学習の場として都市は役に立つべきであり、その目的にそって都市設計と公共政策が遂行されるべきだと考えた (Carr and Lynch, 1968)。しからば、その目的の到達点である彼の理想の都市像とは、どのようなものであろうか。

## 6. 優れた都市

Lynchは、それまで社会思想家や建築家によって提出されてきたユートピア像が、社会と空間の両者をうまく扱っていないいうえに、平凡で画一的であると考えた (Lynch, 1975)。「ユートピアが、快適な生活を送れる場所ではなさそうだとすることには、誰もがすぐ気づくだろう。想像上の地獄のほうが、はるかに豊かで生き生きとしている。(中略) ユートピアの思想が私たちの想像力に訴えるためには、そのヴィジョンをもっと生氣のある複雑なものにして、そこに人々に身近な生活の実体を盛り込まなければならない (Lynch, 1972a, 邦訳 pp. 160-161)」。

Lynch は、*A Theory of Good City Form* で、物的環境としての優れた都市像について論じたが、この著作は彼も危惧しているように (Lynch, 1988, 邦訳 p. 293), 一見、好ましい環境のチェックリストであり、そこから優れた都市の全体像を見極めることは、はなはだ困難である。しかし、個々の項目に、彼の理想像の根底にある価値観を読み取ることはできる。例えば、都市の性能を計る指標の一つにアクセスがあるが、彼は、人・物・情報などへのアクセスは単純に最大化されるべき質のものではないと論じる。すべてがすぐに利用可能であることは望ましいことではない (Lynch, 1981, 邦訳 p. 182)。こうした価値観は、すでに *The Image of the City* の中にも見られる。「細部にいたるまで精密に決定的に秩序立てられた環境のもとでは、活動の新しいパターンは育たないであろう」。個人の成長に有益な基礎を与える秩序とは、「究極的な秩序ではなく、ますます発展しつづける可能性をもつ未完結な秩序」である (Lynch, 1960, 邦訳 p. 7)。このように、Lynch は、自由・抑制・自己達成に価値をおく。自由でしかも抑制のきいた節度ある環境のもとで、個人がそれぞれの立場に応じて環境を学習して成長する。そうした場を与える都市が優れた都市である。*A Theory of Good City Form* の17章に描かれたユートピアは、それゆえ、中庸で複雑なユートピアである。

このような、いわば観念的な理想像は、具体的な都市形態としては、どのような姿として現出するのであろうか。従来、線型都市や直交グリッド型都市など様々な都市形態モデルが提出され、実際にモデルに基づいた都市建設も行われてきた。しかし、Lynch は、こうした形態モデルは、優れた都市の理論とは独立したものと見なすべきだと述べている (Lynch, 1981, 邦訳 p. 270)。

そこで、Lynch の著作の中では、都市の空間構造 (イメージの structure) について最も明確な議論のなされている *The Image of the City* において、優れた都市の空間構造を考えてみたい。この著作における「都市のイメージ」は、先に問題点として挙げたように極めて地図的なものである。それならば、Lynch の理想の都市像 (ここでは、わかりやすさに価値が置かれている) を理解するためには、逆に、わかりやすく、そこからイメージの得やすい地図とはどのようなものかを、彼の文脈の中で考えてみるとよいであろう。その場合の優れた地図とは、①全体的枠組みに置いて、実際の空間との間にズレがない、②主要な都市構造が特に明確に描かれている、③基本構造以外の例えばバイパスを見いだすことが容易である、④見れば見るほど発見があるような情報が描かれている、といった性格を持つ考えられる。したがって、Lynch のいう優れた都市は、次のような空間的構造を持つであろう。まず、都市内の基本的な部分とそれらの関係を明確に、しかも歪みなく住民に認識させることができる構造を持ち、さらに、基本構造のほかに基本構造を補完するサブ構造を持ち、そうした階層体系の中で、視点のレベルを変えるとによって、より詳しい情報を与えることができるような構造である。しかも、このヒエラルキーシステムは、今までのサブ構造が既存のメインな構造にとってかわって基本構造となるような可能性を持つ。



## 7. おわりに

Lynch は、*A Theory of Good City Form* の中で、都市を空間現象として説明しようとする理論を3つに分けている。その第1は、計画理論 (planning theory) であり、計画の目標設定や計画手続きなどの意志決定に関する理論である。第2は、機能理論 (functional theory) で、都市はいかにして現在のようになったか、あるいは、都市はどのように機能しているかを問う理論である。Lynchによれば、近年の都市理論のほとんどはこの理論であり、*A Theory of Good City Form* の付録で、機能理論に属するいくつかの都市の見方を列挙し、それぞれに評価を加えている。第2表は、筆者がこの付録の内容を要約して作成したものである。第3は、Lynchが規範理論 (normative theory) と呼ぶものであり、人間の諸価値と居住環境形態の一般的関係や、優れた都市の見分け方を扱うとしている。彼は、既存の規範理論として、都市を儀式の中核あるいは宇宙と神を表す装置として見なす宇宙理論、都市を実用的な機械と見なす機械理論、都市を相互に作用する部分群からなり全体として自己統制的であると見なす有機理論を挙げている。そして、Lynch自身は普遍的規範理論の構築を目指している。

1960年代後半から1970年代にかけて、アメリカの多くの都市で Lynch の public image に基づく都市構造分析が行われた。また、彼の研究は、都市計画分野に対し有効な景観評価の手法を提供した。<sup>(12)</sup>「しかし、都市設計の道具として見た場合、それは高速道路のような大規模システムの設計を除けば、ほとんど実践の場で展開されることがなかった。その最大の原因は、都市イメージの要素にみられるように、それが都市スケールでの構造を主要な対象にしていたためである」<sup>(13)</sup>。現代の都市は、既存の人工物によって埋めつくされている。また、権利関係も錯綜している。そのため、都市全体の物的計画を実際に立案することは困難で、都市計画の主要な関心は、マクロな空間からミクロな空間へ移っている。<sup>(14)</sup>その一方で、関心は単なる土地利用計画や図面上のプラン以外にも拡大してきた。すなわち、住民のコンセンサスをいかに得るか、社会政策といかにマッチさせるか、建設後の運営とサービス供給をいかに計るか、といったノンフィジカルな側面まで、都市計画の対象と考えられるようになった。<sup>(15)</sup>こうしたノンフィジカルな計画が、ある価値観を内包して遂行されるとすれば、物的環境が人の心に影響を与える点を特に重視したLynchの都市論は、たとえ計画段階の抽象的なレベルに留まるにせよ、考慮されるべき価値をもつといえる。

かつて、地理学と都市計画の関係についての地理学側からの議論は、地理学がその応用的側面として、都市計画のフィジカル・プランニング (主に土地利用計画) にいかに貢献していくかという議論であった。<sup>(16)</sup>しかし、行動論の台頭以降、地理学の間への関心がより深まる中で、地理学と都市計画の関係も自ずと変わっていくであろう。Lynch のめざした普遍的規範理論は、前述のように、その内容を明瞭に把握することは困難であるが、第1表と第2表を比較したとき、第2表に示された機能理論に人文主義が含まれていないことや、Lynchが既存の規範理論として宇宙理論などを挙げていることを考えると、彼の規範理論による都市の見方は、地理学

第2表. 都市認識の違いによる「機能理論」の分類

都市の認識	学派・研究者	キーワード	長所	短所	隠れた価値観
①都市はユニークな歴史過程である	都市地理学研究の多く 都市史小説家 Munford	物語記述 ユニークネス 存在の価値	・都市の観察方法を学べる ・抽象的理論では扱えない「環境の質」を扱える	・一般的な都市の価値を引き出すのが困難 ・体系的な説明原理を持たない	歴史的連続性
②都市は人間集団のエコシステムである	シカゴ派社会学 Park Burgess	空間パターン 集団の置換 因子生態 統計分析	・同心円やセクターといった有用な地図イメージを生んだ ・社会集団の行動の分析に有用	・動的ではあるが非歴史的 ・物的環境の質を扱うのが困難	
③都市は財が生産され分配される空間である	古典的空間経済学 Thünen Christaller Lösch Berry	費用最小化 最適立地 中心地理論	・理論がエレガント ・現実世界をある程度説明可能	・均衡理論は基本的に静的 ・暗黙的に現状肯定 ・金額に変換できない生産物を無視	生産の効率
④都市は力(重力)の場である	交通研究 Zipf	物理学的世界観 重力場 フロー グラフ理論 相互作用	・モデルがエレガントでシンプル ・検証可能, 操作可能	・人間が非人格的な単位ではない ・コミュニケーションにのみ着目	相互作用の最大化
⑤都市はリンクした意志決定のシステムである	居住地移動研究 Chapin	意志決定過程 ゲーム フローチャート システム	・価値理論と直接結び付く ・仮定が明確に語られる	・機械的で曖昧さを扱えない ・システム自体は静的である ・複雑すぎる	有効な決定と運営
⑥都市は闘争の場である	Castells Harvey	マルクス主義 階級 支配 歴史的経緯	・本来的で変化を扱える	・個人的な動機や行為が無視される ・家庭内の資本と労働が無視されてきた	政治的闘争の進行

Lynch (1980, 原著 pp. 327-343) より筆者が作成。「隠れた価値観」については, Lynch (1980, 邦訳 p. 44) より類推した。

の人文主義的なアプローチに近いのかもしれない。しかし、あくまでも計画の実践者の視野に基づく都市論である。人文主義が環境の「意味」を尊重するアプローチであるとするれば、われわれが現実の都市に対峙するとき尊重すべきは、実際に都市に生活する住民にとっての都市環境の「意味」である。しかし、ダイナミックに変化する現代都市において、「意味」を形成する源となる住民の生活行動についてのわれわれの認識は、きわめて限定されたものにすぎない。都市を生活者の立場から捉え、生活空間の実態を認識する努力が必要である。

## 注

- (1) Bassett, K. and Short, J. (1989): Development and diversity in urban geography. in Gregory, D. and Walford, R. (eds.): *Horizons in Human Geography*. pp. 175-193.
- (2) Thrift, N. (1981): Behavioral geography. in Wrigley, N. and Bennet, J. (eds.): *Quantitative Geography*. Routledge and Kegan Paul, pp. 352-356.
- (3) 環境心理学者 Canter は、「Lynch の研究はあらゆる社会科学の中でもっとも物理的であると思われる地理学の分野に一番容易に定着したようである (邦訳 p. 52)」と述べている。  
Canter, D. (1977): *The Psychology of Place*. The Architectural Press (London). 宮田紀元・内田茂訳『場所の心理学』, 彰国社, 1982.
- (4) Lynch の経歴については, Carr, S. Rodwin, L. and Hack, G. (1984): Kevin Lynch-Designing the image of the city. *Journal of the American Planning Association*, 50-4, pp. 523-525.
- (5) Appleyard, D. (1978): The major published works of Kevin Lynch. *Town Planning Review*, 49-4, pp. 551-557.
- (6) *The Image of the City* の紹介としては, 例えば次のものがある。  
植田実 (1975) : ケヴィン・リンチとその周辺。現代思想, 1975年10月号。  
瀬尾文彰 (1981) : 『意味の環境論』彰国社, pp. 95-126。  
Downs, R. and Stea, D. (1973): Cognitive representations-Introduction. in Downs, R. and Stea, D. (eds.): *Image and Environment*. Aldine (Chicago), pp. 79-86. 吉武泰水監訳『環境の空間的イメージ』, 鹿島出版会, 1976, pp. 89-96。  
Gold, J. (1980): *An Introduction to Behavioral Geography*. Oxford University Press, pp. 97-100.
- (7) Orleans, P. (1973): Differential cognition of urban residents: Effect of social scale on mapping. in Downs, R. and Stea, D. (eds.): 前掲(6) pp. 115-130. 邦訳 pp. 127-143。  
同様の調査は, 次の文献においても紹介されている。  
栗原武美子 (1984) : カナダ人の居留意識について。地理, 29-2, pp. 53-62.
- (8) 荒井良雄 (1985) : 圏域と生活行動の位相空間。地域開発, No. 253, pp. 45-56.
- (9) Thrift, N. (1977): Time and theory in human geography, Part II. *Progress in Human Geography*, 1-3, pp. 413-457. 及び, Thrift, N. (1981): 前掲(2)
- (10) Lynch は, 人間の時空間的活動を検討する必要があるとの言及を行う際に, Anderson の文献を引用しているが (Lynch, 1972a, 邦訳 p. 102, p. 355), この文献は, Chapin や Hägerstrand などの研究を比較的早い時期にレビューしたものである。  
Anderson, J. (1971): Space-time budgets and activity studies in urban geography and planning. *Environment and Planning*, 3, pp. 353-368.
- (11) 子供時代の知覚環境について, わが国の研究例としては, 次のものがある。

- 寺本潔 (1988): 『子供世界の地図』黎明書房, 176p.
- (12) Lynch の景観評価手法の応用例としては, 次のものがある。  
北原理雄 (1979): 名古屋東部丘陵地域の景観構造。都市計画別冊, 14, pp. 391-396.  
北原理雄 (1980): 名古屋東部丘陵地域の景観構造保全。都市計画別冊, 15, pp. 283-288.
- (13) 北原理雄 (1983): 都市設計の実現。『新建築学体系17——都市設計』彰国社, pp. 255-339.
- (14) 荒井良雄 (1988): 都市計画。朝野洋一・寺阪昭信・北村嘉行編著『日本の地域構造1—地域の概念と地域構造』大明堂, pp. 175-197.
- (15) 渡辺俊一 (1975): 戦後アメリカ都市計画界のハヤリ・スタリについて (上) (下)。地域開発, No. 126, pp. 68-75. No. 127, pp. 46-55.
- (16) 小林 博 (1966): 都市計画と地理。清水馨八郎・谷岡武雄・西村嘉助編『応用地理学とその課題』大明堂, pp. 83-94.  
山鹿誠次 (1968): 都市計画と地理学。都市計画, No. 56, p. 13.

#### APPENDIX: THE LIST OF PUBLISHED WORKS OF KEVIN LYNCH

- Lynch, K. (1954): The form of cities. *Scientific American*, 190-4, pp. 54-63.
- Lukashok, A. and Lynch, K. (1956): Some childhood memories of the city. *Journal of the American Institute of Planners*, 22-3, pp. 142-152.
- Lynch, K. (1958a): Environmental adaptability. *Journal of the American Institute of Planners*, 24-1, pp. 16-24.
- Lynch, K. and Rodwin, L. (1958b): A theory of urban form. *Journal of the American Institute of Planners*, 24-4, pp. 201-214.
- Lynch, K. and Rivkin, M. (1959): A walk around the block. *Landscape*, 8-3, pp. 24-33.
- Lynch, K. (1960): *The Image of the city*. MIT Press (Cambridge, Mass.), 194p.  
丹下健三・富田玲子訳『都市のイメージ』岩波書店, 1968, 276p.
- Lynch, K. and Rodwin, L. (1961): A world of cities. *Daedalus*, 90-1, pp. 4-10.
- Lynch, K. (1961): The pattern of the metropolis. *Daedalus*, 90-1, pp. 79-98.
- Lynch, K. (1962): *Site Planning*. MIT Press (Cambridge, Mass.), 248p.  
前野淳一郎・佐々木宏訳『敷地計画の技法』鹿島出版会, 1966, 288p.
- Appleyard, D., Lynch, K. and Myer, J. (1964): *The View From the Road*. MIT Press (Cambridge, Mass.), 64p.
- Lynch, K. (1965): The city as environment. *Scientific American*, 213-3, pp. 209-219.
- Lynch, K. (1966): Quality in city design. in Holland, L. B. (ed.): *Who designs America?* Anchor Books (Garden City, N. Y.)
- Appleyard, D., Lynch, K. and Myer, J. (1967): The view from the road. in Lowenthal, D (ed): *Environmental Perception and Behavior*. The university of Chicago, Department of geography, Research paper, 109, pp. 75-88.  
N. B. This paper was extracted from Appleyard, D., Lynch, K. and Myer, J. (1964)
- Carr, S. and Lynch, K. (1968a): Where learning happens. *Daedalus*, 97-4, pp. 1277-1291.  
S D編集部訳「学習の場としての都市」スペース・デザイン (S D), 51, 1969; pp. 57-64.  
Reprinted in Meyerson, M. (ed.): *The Conscience of the city*. Braziller (New York), 1970, pp. 187-201.

- Lynch, K. (1968b): City design and city appearance. in Goodman, W. (ed.): *Principles and Practice of Urban Planning*. International City Managers' Association (Washington, D. C.), pp. 249-276.
- Lynch, K. (1968c): The possible city. *Technology Review*, 70-1.
- Lynch, K. (1970): The openness of open space. in Marcou, O'Leary and Associates (ed.): *Open Space for Human Needs*. The National Urban Coalition (Washington, D. C.), Chapt. 1.
- Lynch, K. (1971): *Site Planning*, Second Edition. MIT Press (Cambridge, Mass.), 384p.  
山田学訳『[新版] 敷地計画の技法』鹿島出版会, 1987, 479p.
- Lynch, K. (1972a): *What Time Is This Place?* MIT Press (Cambridge, Mass.), 277p.  
東大谷研究室訳『時間の中の都市——内部の時間と外部の時間』鹿島出版会, 1974, 371p.
- Lynch, K. (1972b): The openness of open space. in Kepes, G. (ed.): *Arts of the Environment*, Braziller (New York), pp. 108-124. N. B. This paper was written in 1963, and parts of it were published in modified form in Lynch, K. (1970).
- Lynch, K. and Herr, P. (1973): Performance zoning: the small town of Gay Head tries it. *Planner's Notebook* (American Institute of Planners), 3-5, pp. 1-4.
- Lynch, K. (1974): Urban design. *The New Encyclopædia Britannica*, Vol. 18, Encyclopædia Britannica Inc. (Chicago), pp. 1053-1065.
- Lynch, K. (1975): Grounds of utopia. in Honikman, B. (ed.): *Responding to Social Change*. Dowden, Hutchinson & Ross (Stoudsburg, Penn.), pp. 27-46.  
N. B. This paper was republished in slightly different form as Chap. 17 in Lynch, K. (1981).
- Lynch, K. (1976a): *Mandging the Sence of a Region*. MIT Press (Cambridge, Mass.), 221p.  
北原理雄訳『知覚環境の計画』鹿島出版会, 1979, 241p.
- Lynch, K. and Banerjee, T. (1976b): Growing up in cities. *New Society*, 37, No. 722, pp. 281-284.
- Lynch, K. (1976c): Foreword. in Moore, G. T. and Golledge, R. G. (ed.): *Enviromental Knowing*. Dowden, Hutchinson & Ross (Stoudsburg, Penn.), pp. v-viii.
- Lynch, K. (ed.) (1977a): *Growing up in Cities: Studies of the Spatial Environment of Adolescence in Cracow, Melbourne, Mexico City, Salta, Toluca, and Warszawa*. MIT Press (Cambridge, Mass.), 177p.  
北原理雄訳『青少年のための都市環境』鹿島出版会, 1980, 201p.
- Banerjee, T. and Lynch, K. (1977b): Of people and places: a comparative study of the spatial environment of adolescence. *Town Planning Review*, 48, pp. 105-115.
- Lynch, K. (1979): City design: what it is, how it is taught. *Urban Design International*, 1-2.
- Lynch, K. (1981): *A Theory of Good City Form*. MIT Press (Cambridge, Mass.), 514p.  
三村翰弘訳『居住環境の計画——すぐれた都市形態の理論』彰国社, 1984, 381p.
- Lynch, K. (1983): Identity, power, and place: a review of Donald Appleyard's unfinished manuscript. *Places*, 1, pp. 3-6.
- Lynch, K. and Hack, G. (1984a): *Site Planning, Third Edition*. MIT Press (Cambridge, Mass.), 499p.
- Lynch, K. (1984b): Reconsidering the image of the city. in Rodwin, L. and Hollister, R. M. (ed.): *Cities of the Minds: Image and Themes of the City in the Social Sciences*. Plenum (New York), pp. 151-162.

\*The following articles were helpful in compiling this list:

Kevin Lynch in print:

*Journal of the American Planning Association*, 50-4, 1984, pp. 524-525.

Lynch publications cited:

*Journal of the American Planning Association*, 51-2, 1985, pp. 226.